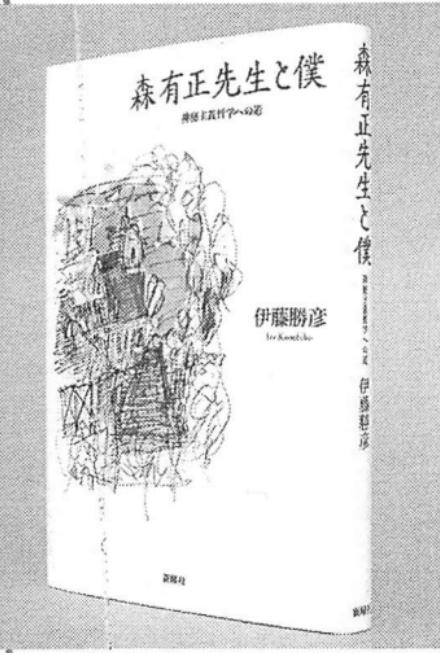




# 森有正先生と僕

伊藤勝彦著

新曜社・2730円



「森有正先生と僕」  
森有正先生への想  
伊藤勝彦  
著者による著者への想  
伊藤勝彦著

森有正は、初代文部大臣  
森有礼を祖父に持ち、父・  
明は牧師。母は徳川本家か  
ら嫁している。そのような  
生家の窓の夕焼けの空の中  
に見た「一本の檼（かし）」

そうさせたのだという。  
森有正は、初代文部大臣  
森有礼を祖父に持ち、父・  
明は牧師。母は徳川本家か  
ら嫁している。そのような  
生家の窓の夕焼けの空の中  
に見た「一本の檼（かし）」

「森有正先生と僕」とい  
う表題がいい。著者は、大  
学1年のときに出会った温  
容で、気取らない人柄にひ  
かれて、「先生に熱中する  
ようになってしまった」と  
いう。当時、森有正是東大  
仏文科助教授。教室ではデ  
カルトを講義し、間もなく  
給費留学生として渡仏す  
る。

そして27年、「森有正  
はなぜかフランスにいつづ  
けた」。一時帰国した森に  
17年ぶりに再会を果たした  
著者は、同じ研究の道を歩  
む人になっていた。著者は  
森の「僕は小さい時から、  
自分が遙（はる）か彼方（か  
なた）へ行くことを夢みて  
いた」という文章を引きな  
がら、それは「旧貴族」の  
家に育つた森自身の幼年時  
から、さまよい続けた魂が  
そうさせるのだという。

の木」こそ、（その心の向  
かう海の向こう）遙か彼方  
にあるものの象徴であつた  
と森有正は記す。

著者にはたいへん不本意

だろうが、デカルト、パス  
カル研究者としての森有正  
や著者の深い思索に近づく  
には到底及ばない私は、本

書を「先生と僕」という美  
しく、そして少しきない  
「物語」として読んだ。隨  
所に引用される森のエッセ  
ーは、もう一度自分の手に

して、「（バビロンの）川  
の流れ」の中に森有正の姿  
を追うことになるだろう。

森有正は熱心なキリスト  
者としての信仰を持ち、バ  
ツハを弾いた。大勢の人か  
ら帰国を待たれながら、パ  
リの地で客死するまでつい  
に帰つてこなかつた森の名  
は私に、その死を深く惜し  
む牧師・加藤常昭によつて  
初めて刻まれた。「自分自  
身の生活と経験に深く根ざ  
す言葉以外は無意味だ」と  
いう自らに課す厳しさの中  
で、「自分の全生涯を賭け  
て、真摯（しんし）に経験

の哲学を探究  
しつづけた」  
森有正、その  
人の像は本書  
によつて一層  
膨らむことに  
なつた。（詩  
人・西村博美）

## 生涯賭け経験の哲学を探究